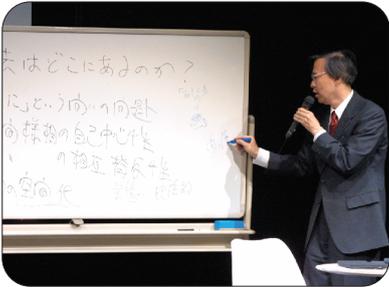


ミニレクチャー2

過去はどこにあるのか？

植村恒一郎



哲学は実験もしないし、新しい「もの」を作ることもしません。哲学の仕事は言葉と概念を分析することなのです。この「過去はどこにあるのか？」という問いには、実は納得のいく答えがあるわけではありません。ただ、このような問いに対する哲学の考え方、思考の方向性というものを説明したいと思います。では具体的にどう考えればよいのか？ この問いに関わる問題点として以下のものが挙げられます。

まず「どこに」という規定のもつ空間性の問題。そもそも「どこかに存在する」ものとは、「ある時ある場所に存在する」ものです。「ある時ある場所に存在する」ものは、もしそこに私が居たならば、それを知覚することができるということを含意しています。したがって、「どこに」と問うことは、その問いの段階においてすでに、「どこかにある」ものを答えとして予想している。ということ、それを知覚できる可能性として理解しているわけです。

ところが、過去とは原理的にそのような知覚の可能性を否定するものなのです。なぜなら「現在」は必ず私が「今ここ」にいるということを含意しているの、で、「今ここ」に存在しない「過去」に私が行くことは原理的に不可能です。私が「そこ」に行けば、そこは「過去」ではなく、「私がいる場所」＝「現在」になってしまいます。「過去」は必ず、私が今いる「この現在ではない」ものであり、「現在」の否定として与えられる存在です。ですから、「ここにあった、ここだ」のように知覚される可能性を原理的に欠いているわけなんです。これを指して哲学では、過去・現在・未来という時間様相は「自己中心性」と「相互相反性」とを伴っているという言い方をします。

その一方でわれわれには、過去そのもの以外にも「記憶」というものが存在しています。記憶は、広義に取れば遺跡、古文書、肖像画、写真、レコード、ビデオなどが含まれますが、狭義には脳の痕跡を考えてもいいでしょう。ここで重要なことは、これらの記憶はすべて現在において存在している、ということです。つまり「記憶」についてはその空間的場所を指定することができるわけです。またわれわれは、時間を年表、カレンダー、

手帳の予定表のように、線的な空間において表現せざるを得ないので、時間を空間化して捉えてしまいます。この空間化された時間においては、空間とまったく同様に「どこに」という言い方でその場所を指示できてしまいます。ですが、逆に言えば、カレンダーには「今」は書かれていないわけです。つまりここでは、現在・過去・未来の「自己中心性」や「相互相反性」が見えなくなっているわけです。すなわちわれわれは厳密に言うと、時間を理解する上で2つの時間の概念を重ねて使ってしまうわけですが、もちろん生活においては両方が必要なのですが、哲学においては、カレンダーのように空間化した時間と現在・未来・過去という時間様相における時間のどちらが根本かで、2派に分かれています。

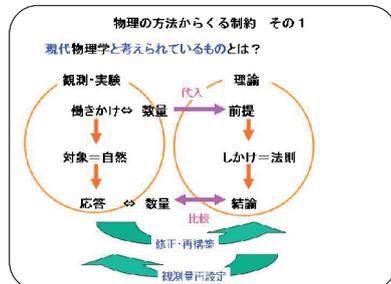
「過去はどこにあるのか？」という問いがあった場合、純粋に時間様相の立場に立つと、この私でない「今」でない時、もしくは「私が生まれる前」という答えになるわけですが、実際には、60億分の1の存在として空間化された時間を取り入れて語らざるを得なくなるんですね。つまりこの一見非常に単純に見える「過去はどこにあるのか？」という問いには、非常に複雑な問題が絡み合っていて、万人を納得させられる答えを導き出せない、というのが哲学的なアプローチなのです。

ミニレクチャー3

物理学では問えない問い

田崎秀一

ここでは、物理学が時間についてあまり扱わない原因についてお話しします。まず物理とは何だろうということですが、物理学の構造というのは、以下のようになっています。



物理というのは自然を知るための学問なわけですが、二重構造になっています。当たり前ですが、観測・実験は外の世界にあり、理論は頭の中にあります。実験というのは対象に対してある働きかけをして、それに対する反応、応答を見るわけです。その結果を見て、働きかけと応答の関係を、前提と結論として普遍化することである法則を導き出すという作業をしています。つまり原因が常に結果に先んじている、という性

格を持っているわけです。ですから、未来が現在に影響を与えるというような設問は物理ではありえないのです。

実験や観測に基礎を置いていることから生じる性格としては、観測者と対象の自然とが同じ時空間にあるため、測れるものが自動的に制限されます。これは何を意味するかというと、例えば仮にわれわれの時空間すべてにおいて時間の流れが遅くなったら、その場合には観測者自身の時間もゆっくりになるわけですから、関係性としては変わらないわけで、その変化には気づけないわけです。それはもしも時間の流れが逆転したとしても、同じように気づけないということになるわけです。

物理は数学を使います。そして数学の論理には時間が入ってこないのです。例えばイプシロン・デルタ論法というものがありまして、それは数列がある極限值に向かって並ぶというものです。

論理の無時間性からくる制約

1. 数学的論理の無時間性
数学の論理に時間的要素がない

例：極限のε-δ論法
数列の極限: $x_1, x_2, x_3, \dots \rightarrow a$
通常のイメージ
定義

これを普通なら時間が経つにつれて数値が近づいている、というように解釈すると思うのですが、数学の場合にはそういう考え方をしません。極限値をどう捉えるかということ、その値を中心にどんなに小さな円を描いてもそこに点が1つ含まれている値、という捉え方をするわけです。つまり数学には、無時間性があると言えます。

例えば宇宙論では、ビッグバン以前にはモノも宇宙もないという言い方をします。その時に数学を使って物質がないことをどのように表現するかというと、密度がゼロだから、というような判断をするわけです。しかし実は数学では、物質という概念が存在しない状況は書けません。お皿の上にリンゴがないは書けますが、リンゴがこの世の中に存在しないという状況は記述できないのです。

このように、物理においてはいろいろな制約によって扱える対象が非常に限定されているわけです。そして時間というものもまさに扱えない対象の一つだというわけです。